

弥生時代の土製紡錘車－福島県の出土資料を中心に－

平間 奠明

1 はじめに

繊維に擦りをかけ、糸にする道具に紡錘がある。紡錘は、軸棒である紡茎とはずみ車およびおもりとしての紡錘車(紡輪)から構成される。遺跡からは、紡錘車単独で出土する場合が多く、考古学では紡錘車を対象とした研究が多く発表されている。

紡錘車の研究は、都道府県ごとや地域ごとの集成・分析が進められてきた。しかし、東北地方における研究事例はいまだ少ないのが現状である。東北地方の紡織技術の変遷を辿るうえでも、紡錘車研究の充実が求められる。

福島県文化財センター白河館(まほろん)における、平成30年度指定文化財展「白河市天王山遺跡の時代」の開催にあたり、福島県各地で出土した弥生時代の土製紡錘車を一部展示する機会を得た。展示を通して各地域における土製紡錘車の様相を見ることができた。

本論は、福島県における弥生時代の土製紡錘車に着目し、形態や重量などの情報を基礎研究として整理するとともに、福島県における弥生時代の土製紡錘車の特徴を捉えることを目的とする。

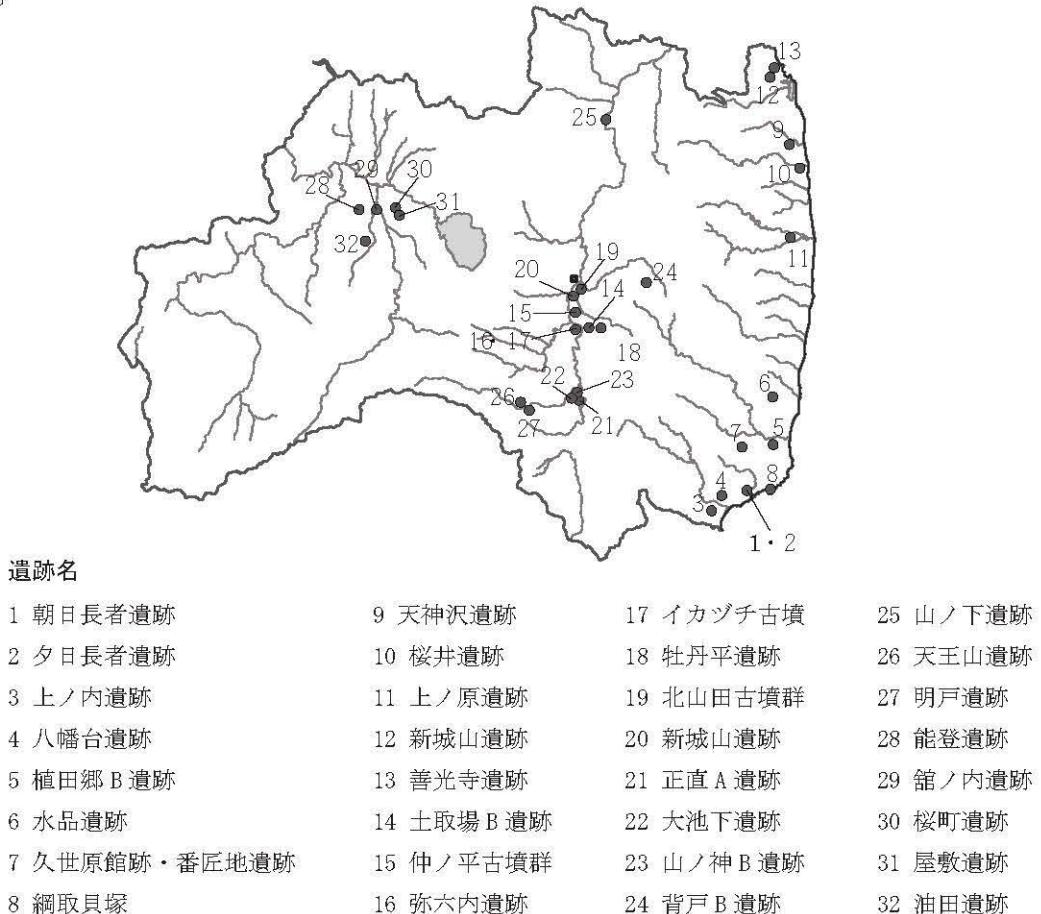


図1 弥生時代土製紡錘車の分布

2 研究史

紡錘車に関する初期の研究には、八幡一郎氏による一連の研究があげられる。八幡氏は、底部に布目压痕のある弥生土器や紡錘車に着目し、弥生時代における紡織技術の広がりについて考察した^(註1)。紡錘車研究の基礎的な研究視点を確立したものとしては、佐原真氏の論があげられる^(註2)。佐原氏は材質・重量・形態ごとに紡錘車を分類し、地域や時期によって差があることを明らかにした。土製・石製紡錘車は当初から紡錘車として製作されたものと石包丁や土器片を転用したものに大別できることを示した。また、紡錘車の重さの違いは繊維の強度や長短、撫りの強弱に関係していることを示唆し、吊り下げて回転させる場合と転がして回転させる場合では、重さの意義は異なることを指摘している。

両氏の研究の後、紡錘車の出土報告が増加するにつれ、各地で紡錘車に関する研究が展開していく。そこで何をもって紡錘車と認定するかという問題がでてくる。北部九州の紡錘車について論じた中間研志氏は、縄文時代後期～弥生時代中期の資料を対象に考察し、時期が新しくなるにつれて規格化されることを明らかにした。中間氏は、土器片転用の紡錘車の存在については消極的な立場をとっている^(註3)。一方で、近畿や瀬戸内海地域の資料から土器転用紡錘車の存在を指摘する意見もある^(註4)。

群馬県内出土の紡錘車を集成・分析した中沢悟氏は、紡錘車の孔径が0.6～0.8cmの範囲に集中することを明らかにした^(註5)。山崎頼人氏は、大阪府甲田南遺跡から出土した有孔円盤の観察をもとに孔の断面形が鼓形を呈するものは、紡茎が差し込まれたとは考えにくいとする^(註6)。松本直子氏は、弥生時代前期の土器片有孔円盤のうち、外形を円形に整え、円筒状に穿孔されたものは紡錘車としての機能を果たすとし、紡錘車の可能性があることを示唆した^(註7)。

諸氏の論究を踏まえ、東村純子氏は紡錘車として認定する基準として孔径と孔形に着目し、各種材質で円盤形に製作あるいは転用・加工され、径0.6～0.8cm程度の円筒状に穿孔されたものが紡錘車として利用できるとした^(註8)。

佐原氏が指摘するように紡錘車の重量は、できあがる糸や使用方法に影響をあたえる重要な要素となるため、紡錘車の重量に着目した研究もみられる。中沢悟氏は、群馬県内の紡錘車について古墳時代後期以降では30g～50g未満のものが最も多く、30g未満のもの、50g～70g未満のものと続くことを明らかにした。これらの領域だけで90%を占めるが、70g以上のものも各時代に一定程度存在することが示された^(註9)。江幡良夫氏は茨城県原田遺跡から出土した弥生時代後期の土製紡錘車の重量分析を行っている。江幡氏は、土製紡錘車の重量が約20g～80gまでの範囲に及び、集中範囲が3領域にわかれることから、意図的な作り分けをしていた可能性を指摘した^(註10)。紡錘車の重量に幅があることについては民俗例などを参考に、紡錘の機能を織糸製作用の紡織具として限定するのではなく、釣糸・網糸製作用の漁獵具である可能性を考慮すべきであることが指摘されている^(註11)。

紡錘車の形態は地域ごとに差異があるため、地域ごとでそれぞれに型式設定が行われている^(註12)。紡錘車の分類は、その断面形をもとにすることが多いようである。断面形態の違いによ

る機能的差異に関しては明らかではないが、素材から円盤を製作する際の技術的違いがあることが考えられている^(註13)。

土製紡錘車の文様については、施文方法や文様が土器の文様と類似していることから土器製作との関係性が考察されている。特に弥生時代後期の東関東系土器文化圏における紡錘車の研究では、土器と紡錘車の文様との関係性が早くから指摘されている^(註14)。また、相澤清利氏は北海道から北陸にかけての有文紡錘車を集成し、弥生時代後期の東北地方の土製紡錘車は東関東文化圏との交流により展開したとみている^(註15)。

3 土製紡錘車の分類

福島県内の土製紡錘車の特徴を把握するために、はじめに形態と文様についてそれぞれ分類し、以下のように定義する。

(1) 形態の分類

- I類：円盤状を呈し、断面は長方形になるもの。
- II類：円盤状を呈し、中央部が肥厚するもの。
- III類：裁頭円錐形で、断面が台形になるもの。
- IV類：全体的に丸みがあり、半球状を呈するもの。

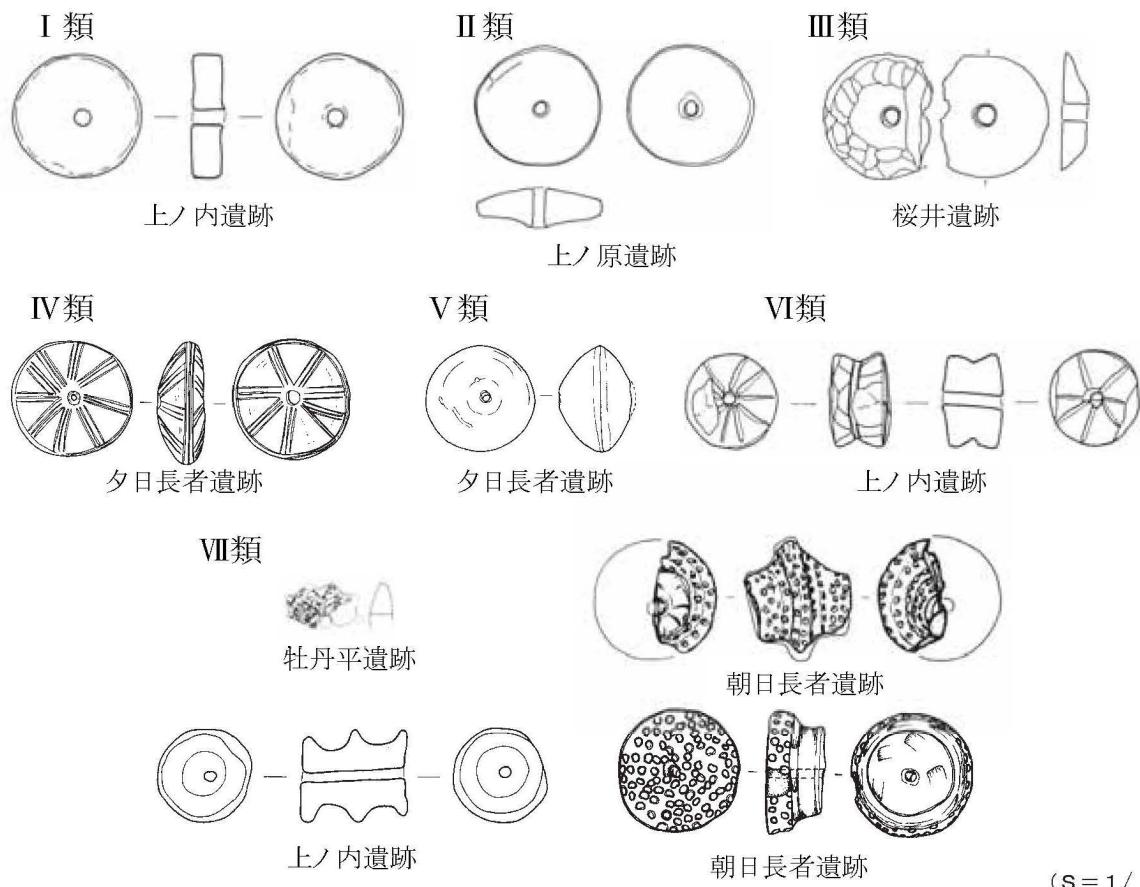


図2 土製紡錘車の形態

V類：算盤玉状で、断面は菱形となるもの。

VI類：鼓形を呈し、側面にくびれがあるもの。

VII類：I～VI類に属さないもの。

I・II類は、福島県全域でみられる紡錘車の形態である。III～VI類は主に浜通り地域で出土が確認されている形態で、中通り・会津では現段階で出土例はみられない。VII類については、I～VI類にあてはまらない形態を一括して分類した。

（2）文様の分類

土製紡錘車の文様については、相澤清利氏による分類(註16)を踏襲し、必要に応じて分類の改変を試みる。相澤氏は北海道から北陸までの土製紡錘車の文様について、大きく5つに分類している。文様の分類は、A：同心円状、B：放射状、C：在地系土器の文様、D：縄文、E：無文となっている。AとBについては刺突文と沈線文に細別し、Cについては波状文・弧文・菱形文・山形文・交互刺突文等の在地土器の文様をまとめて分類している。

本論では紡錘車の文様のうち、平面に施されたものをA～E類と分類するが、C類については弧文・菱形文と定義し、さらに刺突と沈線の2つに細別する。相澤氏の分類では、平面が無文で側面が有文のものは無文の紡錘車として捉えている。本論では側面に施されたものをa～d類に分け、平面が無文で側面が有文のものについては有文の紡錘車として捉える。

〈平面文様の分類〉

A類：同心円状に施文されたもの。刺突による文様がある場合はA₁、沈線による文様がある場合はA₂とする。

B類：放射状に施文されたもの。A類同様、刺突の場合をB₁、沈線の場合をB₂とする。

C類：弧文や菱形文が施されるもの。刺突の施文をC₁、沈線の施文をC₂とする。

D類：縄文が施されるもの。

E類：文様を施さないもの。片面が施文されており、一方の面が無文の場合は有文と捉え、両面が無文の場合のみをE類とする。

〈側面文様の分類〉

a類：刺突による施文があるもの。

b類：沈線による施文があるもの。

c類：縄文を施すもの。

d類：側面に文様を施さないもの。

福島県内の土製紡錘車の平面文様はA～E類、側面文様はa～d類を基本としている。これらの組み合わせによって構成された複合的な文様も存在する。また、A₂類のみの施文は今のところ福島県では確認されておらず、他の文様パターンと組み合わせて用いられる。その他に裏と表で異なる文様を施すような場合もある。なお、複合的な文様については、[A₁+B₁]のように表記する。また、平面の文様が両面で異なる場合は[A₁・B₂]のように表記する。

〈平面の文様〉

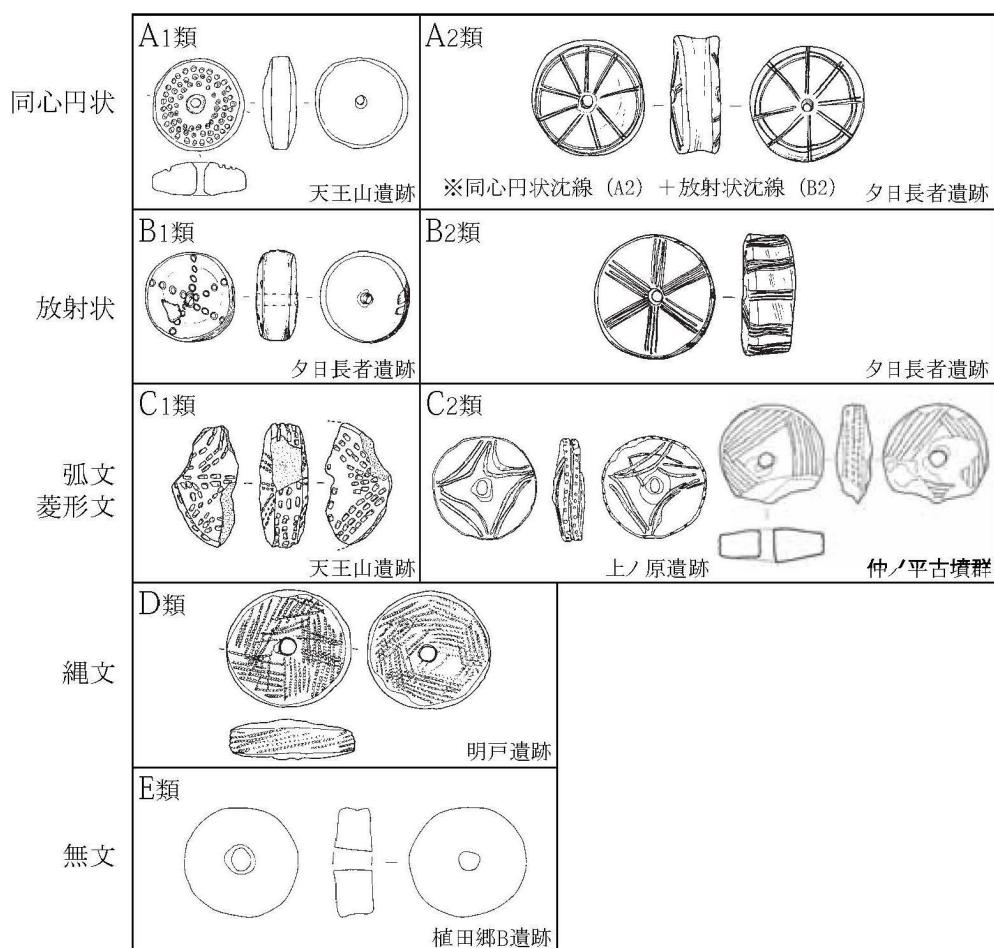


図3 土製紡錘車の平面文様（縮尺不同）

〈側面の文様〉

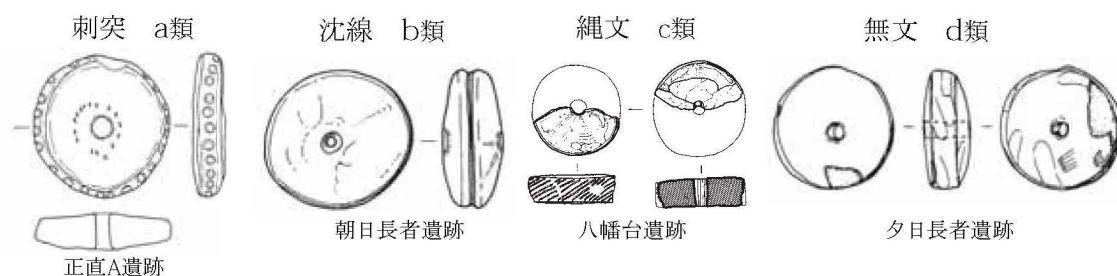


図4 土製紡錘車の側面文様（縮尺不同）

4 福島県における弥生時代の土製紡錘車の様相

ここでは浜通り・中通り・会津の3地域ごとに、土製紡錘車の出土状況などを概観する。本論で集成した紡錘車は、文末の表にまとめてある。集成した紡錘車のうち一部を図5・6に示し、文中()内の数字を図中の番号に対応させている。

(1) 浜通り

浜通りにおける紡錘車については、はじめにいわき市の遺跡からみていくこととする。朝日長者遺跡では複数の紡錘車が確認されている^(註17)。輪山式期の住居跡から出土した紡錘車は、無文で肥厚になるもの(1)が主体的である。しかし、全体に刺突が施され、側面に盛り上がりをもつ特殊な形のものも存在する(2)。八幡台式土器を伴う住居跡からは刺突文のVII類に分類した有段の紡錘車(3)が1点出土している。このほか、十王台式土器を伴う住居跡や遺構からも紡錘車が確認されている(4~6)。

夕日長者遺跡は十王台式期にあたる集落が確認されている^(註18)。十王台式土器が出土する住居跡から放射状刺突文の紡錘車が認められる(7)。6点の紡錘車が出土した後期の住居も検出されおり、床面直上からは無文の紡錘車(8)が2点出土している。また、時期不明の住居跡からもいくつか弥生時代後期のものとみられる紡錘車が出土している(9・11)。V類の紡錘車(10)も夕日長者遺跡からは確認されている。

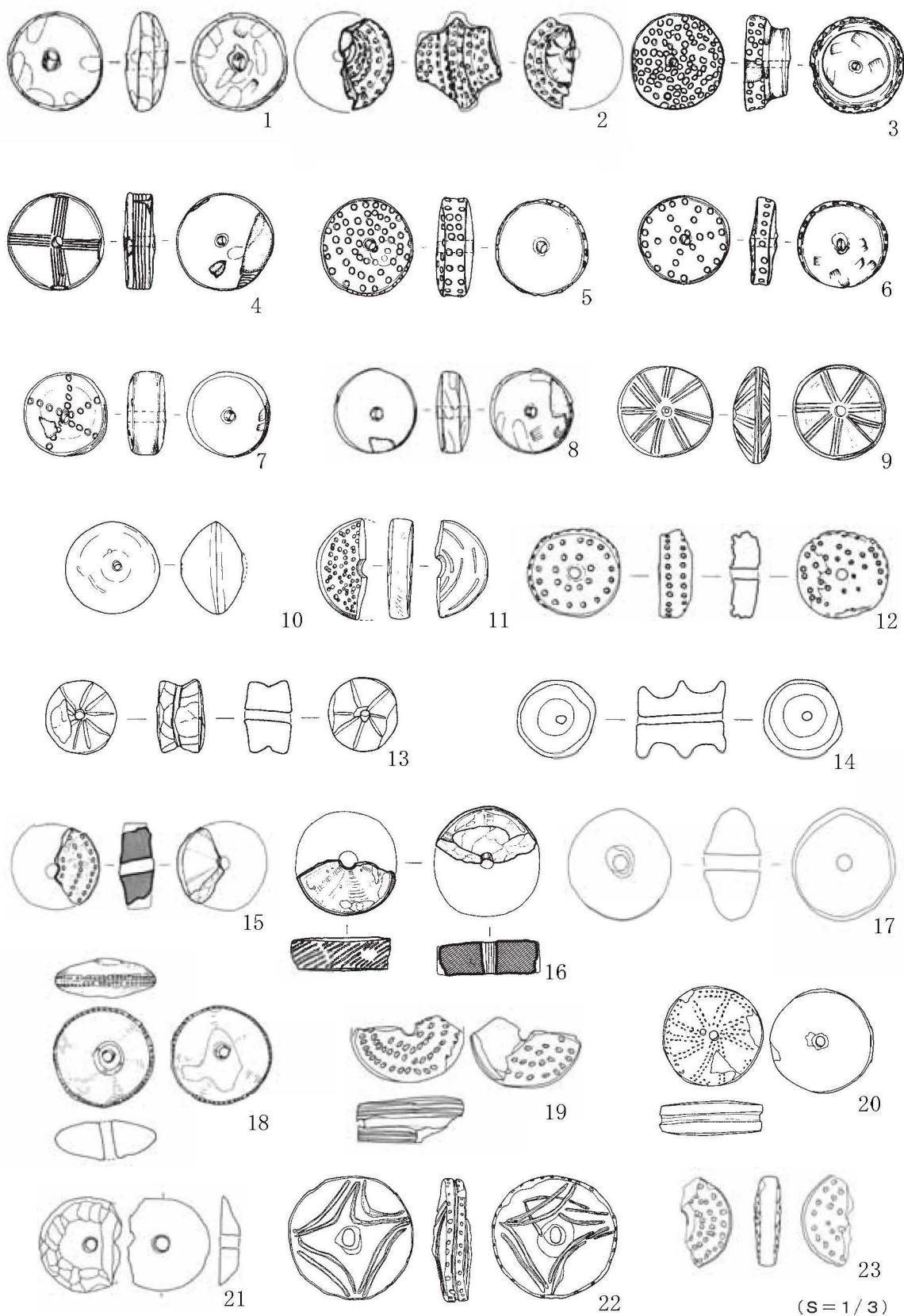
上ノ内遺跡からは、中期の沈線文系土器や伊勢林前式、輪山式、天王山式などの後期の土器が確認されている^(註19)。図に示した刺突文の紡錘車(12)や鼓形を呈するIII類の紡錘車(13)は、後期頃の住居跡からの出土である。また、VII類に分類した特殊な形態の紡錘車(14)も上ノ内遺跡から確認されている。

八幡台遺跡からは5点の紡錘車が出土している^(註20)。そのうち、4点は弥生時代後期の住居跡から出土したもので、平面に同心円状刺突文がある紡錘車(15)と無文の紡錘車3点となってい。弥生土器片が確認された2号墳周溝からは、側面のみに縄文を施したものが1点(16)出土している。

植田郷B遺跡の紡錘車(17)はすべて遺構外から出土している^(註21)。形態はI・II類に分類できる。いずれも遺構外出土の無文のため時期の特定は難しいが、植田郷B遺跡からは龍門寺式、天神原式、天王山式土器が出土しており、弥生時代のものとみておきたい。

このほか、いわき市では水晶遺跡^(註22)や久世原館・番匠地遺跡^(註23)、綱取貝塚^(註24)などの遺物包含層からも弥生時代のものとみられる紡錘車が確認されている。

いわき地域を除いた浜通りでは、南相馬市天神沢遺跡(18)・同市桜井遺跡(19~21)、浪江町上ノ原遺跡(22)、相馬市新城山遺跡(23)から竹島國基氏によって採取された資料群^(註25)がある。これらの紡錘車とともに中期から後期にかけての弥生土器が採取されている。文様をもつ紡錘車は刺突や沈線が主であるなど、いわき市出土の紡錘車と類似する点も多いことから、これらの紡錘車は後期に属するものとみられる。



1～6：朝日長者、7～11：夕日長者、12～14：上ノ内、15・16：八幡台、17：植田郷B
18：天神原、19～21：桜井、22：上ノ原、23：新城山

図5 浜通りの土製紡錘車

しかし、上ノ原遺跡の紡錘車には沈線による弧文の紡錘車(22)もあり、いわき市出土紡錘車にはみられない文様である。また、桜井遺跡では断面形が台形を呈するⅢ類の無文紡錘車(21)が1点採取されている。Ⅲ類の紡錘車は弥生時代末ごろに出現し、古墳時代に盛んにみられる。桜井遺跡のⅢ類の紡錘車も、古墳時代以降に製作された可能性はあるが、本論では弥生時代に属するものとしてとらえておく。このほかに、相馬市善光寺遺跡の表土層から無文の紡錘車が2点出土している^(註26)。表土層からは石庖丁や土師器・須恵器、近世以降の磁器などが確認されている。時期の特定は難しいが、弥生時代のものとみておきたい。

(2) 中通り

中通りは、須賀川市土取場B遺跡の2号塚封土より紡錘車(24)が出土している^(註27)。土取場B遺跡では南御山2式と二ツ釜式の土器が認められ、紡錘車は中期中葉頃のものとみられる。同市仲ノ平古墳群6号墳周溝覆土からは、無文の紡錘車1点と沈線による三角形と側面に刺突が施された紡錘車(25)が1点出土している^(註28)。

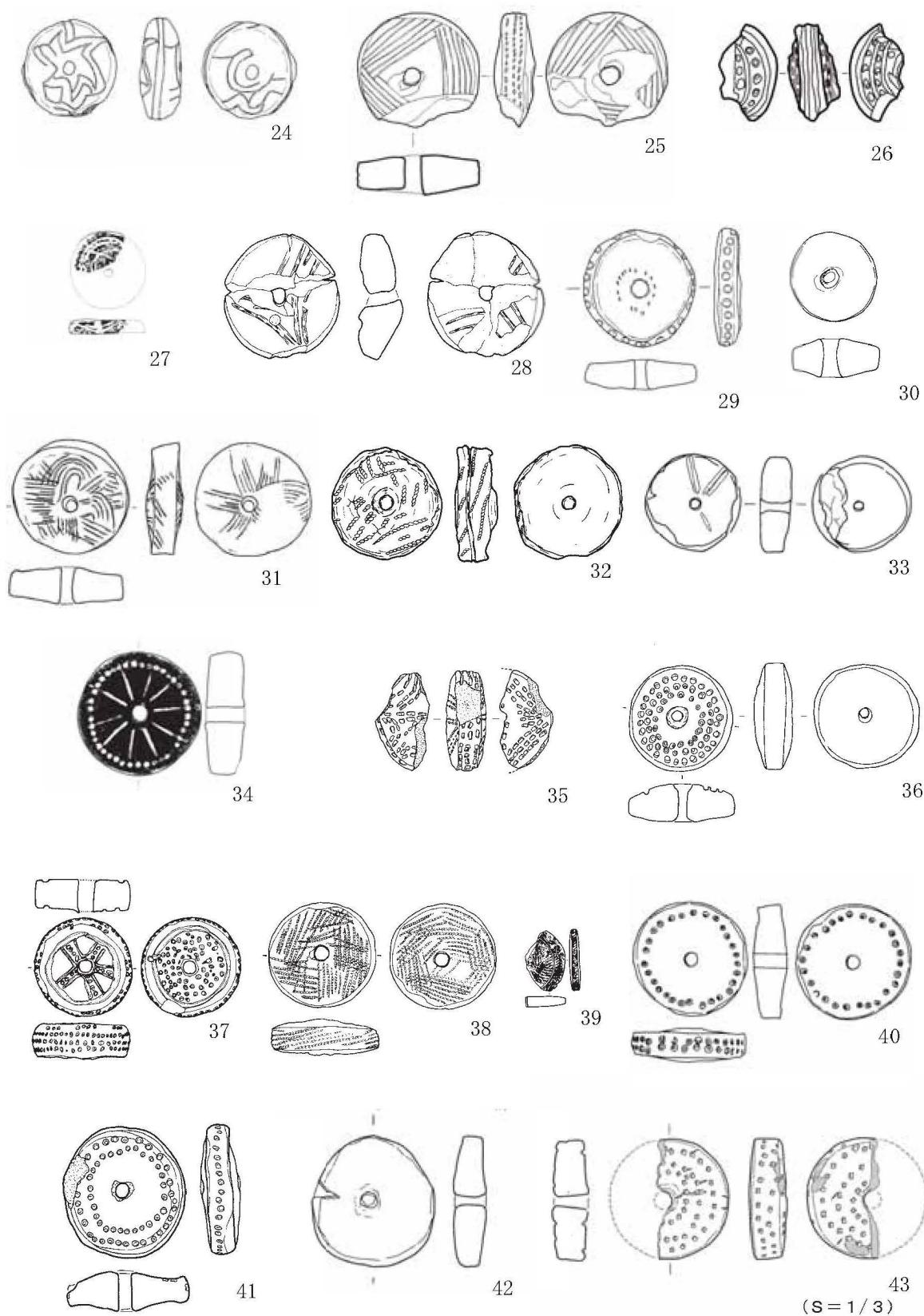
同市弥六内遺跡・イカヅチ古墳では、天王山系土器とともに7点の土製紡錘車が出土している⁽²⁶⁾^(註29)。同市牡丹平遺跡^(註30)から出土した紡錘車(27)は、同心円状沈線の文様を持ち、外側の沈線間に刻み目状の刺突が施され、側面には弧状の沈線が認められる。このほか、紡錘車の周縁に突起があるVII類の紡錘車(図2)も1点確認されている。牡丹平遺跡では前期～中期にかけての遺物を主体とする遺物包含層が検出されているが、一部天王山系とみられる土器も確認されている。紡錘車は弥生後期のものととらえておきたい。

郡山市北山田2号墳の墳丘表土からは、弧文をもつ紡錘車が確認されている⁽²⁸⁾^(註31)。同市正直A遺跡では、弥生時代の紡錘車が4点確認されている^(註32)。図には管状施文具で刺突を施した紡錘車(29)と無文の紡錘車(30)を示した。郡山市出土の紡錘車は共伴する弥生土器の特徴からいざれも後期に属するとみられる。

石川町大池下遺跡出土の紡錘車(31)には、櫛歯状工具による沈線がみられる^(註33)。この遺跡からは南御山2式、桜井式、天王山式以降の土器が確認されているが、紡錘車は後期に属するとみられる。同町山ノ神B遺跡では、縁辺と孔の周囲が盛り上がった形を呈している紡錘車(32)が1点出土している^(註34)。山ノ神B遺跡からは八幡台式期頃とみられる弥生土器片が出土しており、紡錘車はこの時期のものとみられる。石川町ではほかに背戸B遺跡で、弥生時代後期の土器とみられる破片とともに紡錘車が1点出土している^(註35)。

田村市では台ノ前A遺跡から放射状沈線の紡錘車(33)が1点確認されている^(註36)。井戸跡からの出土で、共伴する遺物に弥生時代のものはないが、文様から弥生時代後期のものとみておきたい。福島市山ノ下遺跡からは放射状沈線と縁辺に同心円状刺突を組み合わせた文様構成の紡錘車(34)が出土している^(註37)。文様から弥生時代後期のものと推測される。

天王山式土器の標式となる土器が出土した白河市天王山遺跡では、刺突による三重の弧文の紡錘車(35)と同心円状刺突文(36)の紡錘車2点が確認されている^(註38)。刺突弧文の紡錘車については、刺突が東関東、弧文が天王山系の文様に由来するものであるとし、両系統の折衷型と



24: 土取場B、25: 仲ノ平古墳群、26: イカヅチ古墳、27: 牡丹平、28: 北山田2号墳
 29・30: 正直A、31: 大池下、32: 山ノ神B、33: 台ノ前A、34: 山ノ下、35・36: 天王山、
 37・38: 明戸、39: 能登、40: 館ノ内、41: 桜町、42: 屋敷、43: 油田

図6 中通り・会津の土製紡錘車

みられている^(註39)。

天王山遺跡の南東に位置する同市明戸遺跡からも土製紡錘車が7点出土している(37・38)^(註40)。なかでも、図6(37)の紡錘車は、刺突や沈線などの基本的な施文によって文様に工夫をこらしている点が注目される。明戸遺跡からは天王山式に後続する時期の土器が出土していることから、紡錘車の時期も弥生時代後期後半ごろのものと考えられる。

(3) 会津

会津坂下町能登遺跡は後期初頭の天王山式土器が確認されている遺跡で、天王山式土器を含む遺物包含層から紡錘車が3点出土している^(註41)。図に示した紡錘車(39)は、全体に縄文があり、平面には同心円状沈線と沈線の弧文がみられる。文様構成は天王山式土器に類似しているとみられる。同町館ノ内遺跡からは天王山式期以降の土器や十王台式土器が認められる^(註42)。館ノ内遺跡からは2点の紡錘車が出土し、刺突による文様がみられる(40)。

湯川村桜町遺跡からは天王山式土器に後続する時期の在地土器のほかに、北関東系・北陸系土器が出土している^(註43)。紡錘車(41)は、後期ごろの土坑から出土している。

会津若松市屋敷遺跡は、弥生時代中期の平行沈線文系土器や後期の天王山式土器のほか、北陸系土器が確認されている遺跡である^(註44)。1号および7号特殊遺構覆土から紡錘車(42)が1点ずつ確認されており、いずれも無文である。遺構は弥生時代よりも後の時代のもので、紡錘車の時期を特定するのはやや難しいが、弥生時代のものとみておく。

会津美里町油田遺跡からは紡錘車の破片が2点出土している(43)^(註45)。この遺跡からは、弥生時代前期～中期にかけての弥生土器が主に出土しているが、紡錘車については文様の特徴から後期に属するものとみておきたい。

以上簡単ではあるが福島県内の土製紡錘車について概観してきた。遺物の出土状況から浜通りでは弥生時代後期前半頃に土製紡錘車が出現し、後期を中心に普及したようである。一遺跡から複数の紡錘車が確認される例が多く、一住居から複数個の紡錘車が出土する場合もあり、集落内で糸づくりが盛んに行われていたことが窺える。

中通りでは、土取場B遺跡の紡錘車は弥生時代中期中葉頃のものとみられ、福島県内の土製紡錘車のなかでも最も古い段階のものと考えられる。中通りでの土製紡錘車の本格的な導入は、浜通り同様に弥生時代後期とみてよいだろう。

会津では、弥生時代後期初頭から前半頃に紡錘車が出現すると考えられる。浜通りと中通りに比べて会津地域では、紡錘車の出土が確認された遺跡数や紡錘車の数そのものが少ない。このことから、福島県内で紡錘車の使用状況に地域的偏りが想定される。

5. 土製紡錘車の特徴

(1) 形態について

紡錘車の形態は、中通り・会津はI・II類が主に確認できる。浜通りではI・II類のほか、III～VI類の形態も一部確認できる。III～VI類は茨城県の弥生時代後期の遺跡からも類例が確認

でき^(註46)、茨城県からいわき地方にかけて分布している形態である。

利根川流域にかけての土製紡錘車についてまとめた古内茂氏は、利根川の右岸域に比べて左岸域(利根川下流域から霞ヶ浦沿岸地域)の紡錘車は形態的・量的に豊富であることを指摘している^(註47)。いわき地域にみられるⅢ～VI類は霞ヶ浦沿岸地域の紡錘車にも類似する形態であり、霞ヶ浦沿岸地域の形態の種類に富んだ紡錘車との関係がみられる。

しかし、VII類については、霞ヶ浦沿岸地域にも類例はなく、牡丹平遺跡例やいわき地方のVII類は独自に展開した形態として捉えることができる。また、報告書上では紡錘車とされるが、形態的に類例が少なく、紡錘車以外の用途の製品である可能性もある。VII類については出土例が少なく、今後の資料の蓄積を待って改めて分類を検討することとしたい。

(2) 文様について

浜通りの紡錘車では、平面に施す文様としてA₁類・B₁類・B₂類・D類のほか、同心円状と放射状の刺突文の組み合わせ[A₁+B₁]あるいは沈線文の組み合わせ[A₂+B₂]が主としてみられる。側面の文様では、刺突文[a]、沈線文[b]、縄文[c]のほか、刺突と沈線の組み合わせ[a+b]がみられる。

中通り・会津の紡錘車の基本的な文様構成は浜通りと同じである。中通りや会津で製作された紡錘車のなかには、いわき市や浜通りに分布する型式の土器と共に伴するものもある。このことから中通りや会津の土製紡錘車は浜通りの影響があるものと考えられる。

福島県外で類似する文様をもつ紡錘車は、東中根式～十王台式土器および上稻吉式の分布域を中心に出土している。相澤氏は紡錘車の同心円状・放射状の刺突や沈線による文様は十王台式、上稻吉式土器の文化圏を中心に分布することを示し、これらを「東関東系」文様と称している^(註48)。

一方で、福島県内では「東関東系」文様以外の文様もいくつか確認できる。土取場B遺跡例は、沈線による波状の文様で、同心円状あるいは放射状の刺突文や沈線文とは異なり、中期中葉の文様と後期の文様の間に連続性はあまりみられないようである。

また、中通りや会津では山ノ神B遺跡例[D] [b+c] や能登遺跡例[A₁+C+D] [c] のように縄文と沈線を組み合わせた文様構成が確認できる。ほかには、天王山遺跡の刺突の弧文(C₁)、上ノ原遺跡や北山田2号墳などの沈線の弧文(C₂)、仲ノ平古墳群出土紡錘車の三角形の文様(C₂)がみられる。これらの文様は「東関東系」文様というよりは在地系土器や東北部の紡錘車に由来する文様^(註49)に近いことが考えられる。

最後に文様の有無について着目してみる。浜通り地域の紡錘車105点のうち平面と側面どちらにも文様のない紡錘車[E] [d] は51点であり、約半数が無文の紡錘車となっている。中通りでは34点中9点が無文、会津地域では10点中3点が無文となっている。浜通りでは有文・無文が概ね半分ずつ認められるが、中通り・会津では有文紡錘車が7割以上を占めている。中通り・会津における紡錘車は有文紡錘車の割合がより高い傾向にある。

(3) 紡錘車の法量について

本論の集成で取り上げた土製紡錘車 150 点のうち、残存率が 9 割以上の紡錘車から 83 点を抽出し、重量と直径の関係について図 7 に示した。土製紡錘車の重量は 30.0 ~ 60.0 g の範囲に集中する。浜通り・中通り・会津の 3 地域における資料数に偏りはあるが、福島県における弥生時代の土製紡錘車は、概ねこの範囲の重量のものが主体的だったと推測される。しかし、浜通りの資料の中には、30.0

g 未満のものや 60.0 g を超えるものも認められる。30.0 ~ 60.0 g の範囲にある重量の紡錘車が、主に紡織に関する糸を紡ぐ際に用いられたものと考えられる。一方で、浜通りにみられる主要範囲外の重量のものは、紡織用の糸だけではなく、様々な用途の糸を紡ぎだすためのものと推測される。

次に、直径と厚さの関係について図 8 に示した。図 8 で対象とした資料群は図 7 で対象とした資料群と同一のものである。また、ここでいう厚さとは、紡錘車の最厚部分を指し、その計測値をもとに図化している。

中通り・会津における資料では、紡錘車の厚さが概ね 1.0 ~ 2.0 cm の範囲に収まる。一方で浜通りでは、1.0 ~ 3.0 cm の範囲に収まり、中通りや会津に比べてやや厚みの幅が大きくなる。中通りと会津の紡錘車の形態は主に I ・ II 類に形態が限定されている。それに対して浜通りの紡錘車の形態は、I 類 ~ VII 類までの種類があり、形態の豊富さに応じて厚さの数値にも幅が生じたものと考えられる。

紡錘車の直径は、重量や厚さと同様に浜通りと中通り・会津で違いがみられる。図 7 と図 8 で示すように、浜通りでは 3.5 ~ 5.5 cm の範囲に集中し、中通り・会津では 4.0 ~ 6.0 cm の範囲に集中する。

孔径については図 9 に示した。図 9 で対象とした資料は、孔径を計測した完形の資料に、穿孔が完全に残存している紡錘車の破片も加えて、合計 102 点の紡錘車をもとに図化している。

これまでにみてきた重量・厚さ・直径は数値に幅があったのに対して、紡錘車の孔径は全体的に 0.5 ~ 0.7 cm に集中する。孔径は 0.4 ~ 1.0 cm までのものが確認されたが、この 0.5 ~ 0.7 cm の孔径で 7 割以上を占めている。

中沢悟氏は、紡錘車の孔径が 0.6 ~ 0.8 cm の範囲に集中し、0.5 ~ 0.9 cm の範囲では 9 割以上を占めることを明らかにした。そのことから、糸を紡ぐためには紡茎の太さに一定の制約があつ

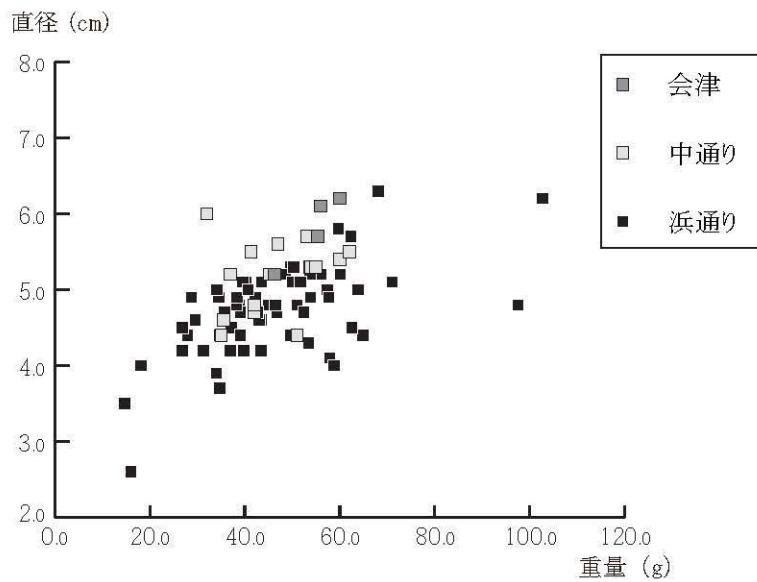


図 7 土製紡錘車の直径と重量 (資料数 83 点)

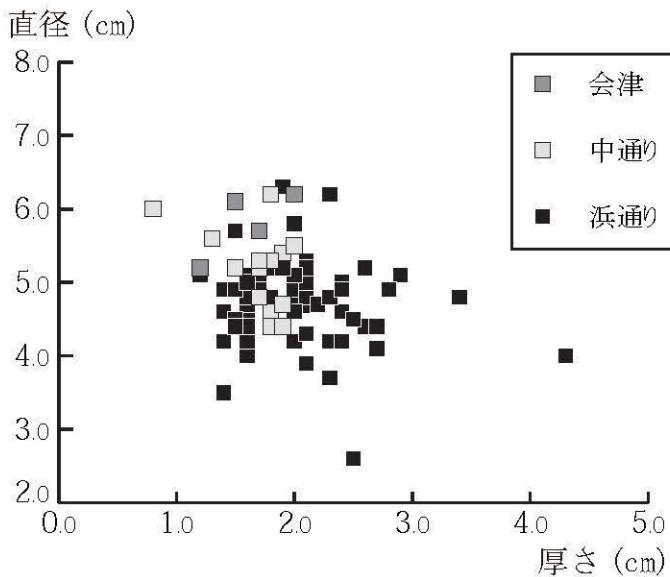


図8 土製紡錘車の直径と厚さ (資料数 83点)

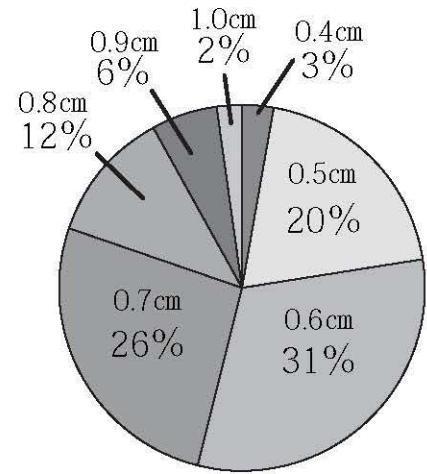


図9 土製紡錘車の孔経
(資料数 102点)

たとみでいる^(註50)。福島県の土製紡錘車に関しても、孔径が0.5～0.7cmの範囲に集中することから、一定の制限のもと孔が穿たれたとみてよいだろう。

6 おわりに

土製紡錘車の基礎的な情報について整理を行ってきた。福島県における土製紡錘車は弥生時代中期中葉に中通りで出現するが、本格的な導入は弥生時代後期に入ってからと考えられる。後期の土製紡錘車の文様は、東関東系土器文化圏の紡錘車に由来するとみられ、いわき地域を中心に福島県全域に展開したと考えられる。しかし、文様のなかには在地土器や東北北部との関係性がみられるものもあり、地域特有の文様の展開も窺える。浜通りでは有文と無文の割合が概ね半分ずつであるのに対して、中通り・会津では有文紡錘車が7割以上を占めている。また、紡錘車の出土数には偏りがあり、使用状況に地域ごとで違いがあったものとみられる。

形態については、I～VII類までの7つに分類した。中通り・会津ではI類とII類が主に出土している。浜通りではI・II類が主体的ではあるが、III～VII類も出土しており、形態の豊富さが認められた。

紡錘車の法量については、83点の資料を対象に分析を行った。紡錘車の直径は、中通り・会津では4.0～6.0cmの大きさが多く、浜通りでは3.5～5.5cmの範囲に集中する。厚さに関しては、中通り・会津では1.0～2.0cmの範囲のものが多くを占めている。浜通りでは1.0～3.0cmの範囲に収まる。浜通りの紡錘車の厚さに幅があるのは、形態の豊富さが反映されたものとみられる。重量については、30.0～60.0gの範囲に集中するが、浜通りでは30.0g未満のものや60.0g以上の重量のものも確認できる。

直径・厚さ・重量には幅が認められるが、孔径については0.5～0.7cmの範囲のものが7割

以上を占めており(資料数102点)、一定の基準のもと穿孔がされていたことが想定される。先行研究で孔径の大きさは限定される傾向にあることが明らかにされており、福島県の土製紡錘車でも同様のことが指摘できよう。

以上のことから、本論で示した福島県における弥生時代の土製紡錘車の主な特徴である。これらを踏まえ、今後の研究を進めるにあたっての課題を述べる。

紡錘車の出土は膨大な数に上り、遺漏もあるものと思われる。また、紡錘車は時期を特定するのが難しい遺物でもある。今後は、出土例の蓄積および紡錘車の年代の精査を進めていく必要があろう。

本論では触れなかったが、福島県では弥生時代の石製、木製、骨角製の紡錘車は確認できなかった。弥生時代には木製紡錘車や骨角製紡錘車との併用も想定されるが、福島県では石製紡錘車が導入されるのは古墳時代に入ってからとみられる。紡錘車は時期によって使用される材質に変化がみられるため、福島県内でどのような変遷をたどるのか、土製以外の材質の紡錘車も含めて時代ごとに捉えていく必要があるだろう。

また近年では、喜多方市高堂太遺跡の織機部材^(註51)や同市西木流C遺跡^(註52)の整経籠といった古代・中世の紡織具の報告があり、徐々にではあるが福島県内でも木製紡織具の出土例が蓄積されつつある。紡錘車だけではなく、これらの紡織具との関係を示しつつ、総合的に紡織技術の解明が求められる。

＜謝 辞＞

本論を執筆するにあたり、下記の諸機関に資料調査の機会をいただいた。末筆ながら心より御礼申し上げる次第である。

会津坂下町埋蔵文化財センター、いわき市教育委員会、いわき市考古資料館、白河市歴史民俗資料館、須賀川市立博物館、福島県立博物館（五十音順）

＜補 註＞

- (註1) 八幡一郎 1932 「弥生式土器の布目」『人類学雑誌』第46巻9号 日本人類学会
同上 1947 「日本における紡織技術の起源」『あんとろぼす』第2巻4号
同上 1967 「弥生時代紡錘車観書」『末永先生古稀記念古代学論叢』 末永先生古稀記念会
同上 1974 「紡錘車について」『歴史と地理』231号 山川出版社
- (註2) 佐原真 1969 「土製品」『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会
- (註3) 中間研志 1985 「紡錘車の研究 我国稻作農耕文化の一要因としての紡織技術の展開について」『石崎曲り田遺跡』 福岡県教育委員会
- (註4) 藤原淳子 1985 「紡織具と製品 I. 紡錘車」『弥生文化の研究5 道具と技術I』 雄山閣
- (註5) 中沢悟 1996 「紡錘車の基礎研究 群馬県内を中心として」『研究紀要』13 勝群馬県埋蔵文化財調査事業団
中沢悟 1996 「紡錘車の基礎研究(2) 群馬県内を中心として」『専修考古学』第6号 専修大学考古学会
- (註6) 山崎頼人 1998 「156の弥生紡錘車 甲田南遺跡出土の紡錘車を持つ意味」『大阪文化財研究』14 勝大阪府文化財調査センター
- (註7) 松本直子 2002 「弥生時代前期の土器片円盤類 紡錘車である可能性の再検討」『環瀬戸内海の考古学 平井勝氏追悼論文集』 古代吉備研究会

- (註8) 東村純子 2006 「紡錘の機能と使用方法についての諸問題」『日本出土原始古代織維製品の分析調査による発展的研究』科学研究費補助金・基盤研究(A) (2)
- 東村純子 2011 『考古学から見た古代日本の紡織』 六一書房
- (註9) 註5に同じ。
- (註10) 江幡良夫 1994 「原田遺跡群出土紡錘車について(1)」『研究ノート』4号 茨城県教育財団
- (註11) 註8に同じ。
- (註12) 註5、註10に同じ。このほかに以下の論などで型式設定がされている。
- 岡野秀典 2004 「山梨県出土の紡錘車」『山梨考古学論集V』山梨県考古学協会
- 河北秀美 1991 「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」『Mie History』vol.3 三重県歴史文化研究会
- 國下多美樹 1988 「京都府下の紡錘車について」『京都考古』第50号 京都考古刊行会
- 豊島雪絵 2001 「古墳時代における石製紡錘車の性格 中国・近畿地方出土例を中心に」『古代吉備』第23集 古代吉備研究会
- 中田裕香 1985 「擦文時代の紡錘車」『古代文化』第41号第6号 古代学協会
- 平尾和久 2008 「紡錘車の編年とその画期 北部九州出土資料を中心に」『伊都国歴史博物館紀要』第3号 伊都国歴史博物館
- 村松篤 2002 「弥生時代の紡錘車」『埼玉考古』第37号 埼玉考古学会
- (註12) 註8に同じ。
- (註13) 中田裕香 1985 「擦文時代の紡錘車」『古代文化』第41卷第6号 古代学協会
- (註14) 渡辺明・川崎純徳 1972 「常総地方の所謂「紡錘車」について」『常総台地』6 常総台地研究会
柿沼修平 1985 「北総における弥生時代土製紡錘車の評価」『史館』第18号 市川ジャーナル
古内茂 2005 「弥生時代土製紡錘車 利根川下流域を中心として」『三澤正善君追悼記念論集怒濤の考古学』三澤正善君追悼記念論集刊行会
- (註15) 相澤清利 2010 「有文紡錘車考 東関東・東北・北陸・北海道の事例」『宮城考古学』第12号 宮城県考古学会
- (註16) 註15に同じ。
- (註17) いわき市教育文化事業団 1981 『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』いわき市教育委員会
- (註18) 註17に同じ。
- (註19) いわき市教育文化事業団 1994 『上ノ内遺跡』 いわき市教育委員会
- (註20) いわき市教育文化事業団 1980 『八幡台遺跡』 いわき市教育委員会
- (註21) 和深俊夫 2002 『植田郷B遺跡』 いわき市教育委員会
- (註22) 鈴木隆康・吉田生哉 2010 『水晶遺跡』 いわき市教育委員会
- (註23) 末永成清ほか 2016 『久世原館跡5・番匠地遺跡4』 いわき市教育委員会
- (註24) 佐藤典邦・山崎京美 1996 『綱取貝塚』 いわき市教育委員会
- (註25) 竹島國基 1983 『天神沢』
竹島國基 1992 『桜井』
福島県立博物館 2003 『福島県相双地域の弥生時代遺跡』
- (註26) 福島県文化センター 1988 「善光寺遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告4』福島県教育委員会
- (註27) 福島県文化センター 1982 「土取場B遺跡」『広域農道開発事業阿武隈地区遺跡分布調査報告(2)』福島県教育委員会
- (註28) (財)広域社会福祉会東洋文化財研究所 1987 『仲ノ平古墳群』
- (註29) 須賀川市 1979 『須賀川市史 自然原始古代』
- (註30) 福島県文化センター 1983 「牡丹平遺跡」『広域農業開発事業阿武隈地区遺跡分布調査報告(3)』福島県教育委員会
- (註31) 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1986 『北山田2号墳発掘調査概報』 郡山市教育委員会
- (註32) 福島県文化センター 1994 「正直A遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告34上巻』福島県教育委員会

- 福島県文化センター 1984 「正直A遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡分布調査報告8』
福島県教育委員会
- (註33) 福島県文化センター 1987 「大池下遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡分布調査報告
11』 福島県教育委員会
- (註34) 福島県文化センター 1987 「山ノ神B遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡分布調査報告
11』 福島県教育委員会
- (註35) 福島県文化センター 1984 「背戸B遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡分布調査報告8』
福島県教育委員会
- (註36) 福島県文化センター 1992 「台ノ前A遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告18』 福島県教育
委員会
- (註37) 新堀昭宏 2015 『山ノ下遺跡5』 福島市教育委員会
- (註38) 白河市 2001 『白河市史 第4巻 資料編1 自然・考古』
- (註39) 註15に同じ。
- (註40) 福島県教育委員会 1984 『明戸遺跡発掘調査概報』
- (註41) 福島県文化センター 1990 「能登遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告10』 福島県教育委員
会
- (註42) 古川利意 1988 『館ノ内遺跡・細田遺跡』 会津坂下町教育委員会
- (註43) 安田稔ほか 2005 「桜町遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告5』 福島県教育委員会
- (註44) 福島県文化センター 1991 「屋敷遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告12』 福島県教育委員
会
- (註45) 阿部健太郎ほか 2007 『油田遺跡』 会津美里町教育委員会
- (註46) 註10、註14に同じ。
- (註47) 古内茂 2005 「弥生時代土製紡錘車 利根川下流域を中心として」『三澤正善君追悼記念論集
怒濤の考古学』 三澤正善君追悼記念論集刊行会
- (註48) 註15に同じ。
- 相澤氏は、A1、B1、B2、[A1+B1]、[A2+B2]の5類型を基本的な文様パターンとして、「東関東系」
文様と称している。
- (註49) 相澤氏は、東北中・南部における後期の紡錘車の文様は、在地土器の文様や施文具に共通性がみら
れ、東関東系と天王山系の折衷型の文様が多いと指摘している。東北部では弧文や重菱文（「東北
北部系」文様）が紡錘車に特徴的に採用されている点も言及している（註15）。本論では、仲ノ
平古墳群の文様は重菱文に類するものとみている。
- (註50) 註5に同じ。
- (註51) 福島雅儀・菅野和博 2009 「高堂太遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告9』 福島県教育委
員会
- (註52) 藤谷誠・鶴見諒平 2014 「西木流C遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告13』 福島県教育
委員会

表1 土製紡錘車一覧表(1)

()内は残存長・残存重量、空欄は計測未実施。*付きNo.は、文中で図示した資料。

No.	遺跡	所在地	出土地点	法量(cm)				形態	文様		報告書等 図番号
				直径	厚	孔径	重量(g)		平面	側面	
1	朝日長者	いわき市	1住覆土	5.1	2.0	0.6	40.3	II	E	d	8-18
2	朝日長者	いわき市	1住覆土	5.3	2.1	0.7	49.7	II	E	a	8-19
3	朝日長者	いわき市	10住床面	5.8	2.0	0.8	59.7	II	E	d	17-40
※4	朝日長者	いわき市	18住床面	5.0	2.4	0.4	57.4	VII	A1	a	24-78
※5	朝日長者	いわき市	47住床直	4.8	2.0	0.8	38.8	II	E	d	64-227
※6	朝日長者	いわき市	48住覆土	(4.6)	(4.0)	(0.7)	(22.0)	VII	A1	a	64-241
7	朝日長者	いわき市	50住覆土	(5.9)	(1.9)	-	(13.1)	II	E	d	69-250
※8	朝日長者	いわき市	55住覆土	4.9	1.6	0.5	38.2	I	B2	b	73-263
※9	朝日長者	いわき市	80住覆土	4.7	1.8	0.5	35.7	I	A1	a	110-414
※10	朝日長者	いわき市	80住覆土	4.6	1.4	0.5	29.6	II	A1+B1	a	110-415
11	朝日長者	いわき市	80住覆土	(6.6)	-	-	(10.7)	I	D	d	110-416
12	朝日長者	いわき市	7坑覆土	4.0	1.6	0.6	18.2	I	E	c	207-2056
13	朝日長者	いわき市	18住覆土	4.6	3.4	0.5	(39.8)	V	E	d	207-2057
14	朝日長者	いわき市	105住覆土	4.4	2.6	0.7	49.7	II	E	d	207-2058
※15	朝日長者	いわき市	105住床面	4.7	2.1	0.6	46.8	II	E	b	207-2059
16	朝日長者	いわき市	表土	4.2	1.4	0.5	26.9	II	E	d	207-2060
17	朝日長者	いわき市	表土	4.4	1.6	0.5	28.0	II	E	d	207-2061
18	朝日長者	いわき市	覆土	4.5	1.6	0.7	37.1	I	A1	a	207-2062
19	朝日長者	いわき市	105住ピット	4.7	1.6	0.5	39.1	I	A1	a	207-2063
20	朝日長者	いわき市	覆土	(4.6)	2.2	(0.7)		II	A1	d	207-2065
21	夕日長者	いわき市	66住床面	4.6	2.1	0.6	(45.9)	II	E	d	270-191
※22	夕日長者	いわき市	69住床面	4.2	2.0	0.5	36.9	II	B1	d	277-212
23	夕日長者	いわき市	78住床直	4.2	2.3	0.6	43.4	II	A1	a	287-239
24	夕日長者	いわき市	78住覆土	(5.3)	2.3	0.5	(16.7)	II	E	d	287-240
25	夕日長者	いわき市	78住覆土	4.6	2.4	0.6	43.5	I	A1	a	287-241
※26	夕日長者	いわき市	78住床直	4.2	1.6	0.6	31.3	II	E	d	287-242
27	夕日長者	いわき市	78住床直	3.9	2.1	0.6	34.0	I	E	d	287-243
28	夕日長者	いわき市	78住覆土	5.2	1.8	0.7	48.5	II	E	d	287-244
29	夕日長者	いわき市	46住覆土	4.8	1.8	0.6	38.3	II	A1・B2	b	318-844
※30	夕日長者	いわき市	62住覆土	4.9	2.0	0.6	38.4	IV	B2	b	318-845
※31	夕日長者	いわき市	30住覆土	4.8	2.1	0.6	51.0	I	A2+B2	d	318-846
32	夕日長者	いわき市	表土	4.5	1.5	0.6	26.9	II	D	d	318-847
33	夕日長者	いわき市	17住覆土	4.6	2.0	0.5	43.0	II	E	b	318-848
34	夕日長者	いわき市	27住表土	5.1	1.7	0.8	50.1	II	E	d	318-849
35	夕日長者	いわき市	34住ピット	4.9	2.8	0.7	57.9	II	E	d	318-850
36	夕日長者	いわき市	56住	4.4	1.6	0.5	34.6	I	A1	a	318-851
※37	夕日長者	いわき市	67住	4.4	(3.1)	0.4	(47.9)	V	E	d	318-852
38	夕日長者	いわき市	65住	(4.6)	(3.8)	(0.7)	(32.8)	V	E	d	318-853
※39	夕日長者	いわき市	74住	4.7	2.2	0.6	52.4	I	B2	b	318-854
40	夕日長者	いわき市	59住	4.8	-	(0.6)	(22.5)	II	A1	a	318-855
※41	夕日長者	いわき市	D-28	(5.2)	1.5	(0.7)	(21.9)	I	A1・A2	d	318-856
42	夕日長者	いわき市	表土	5.3	-	0.6	(46.3)	II	E	a	320-899
43	夕日長者	いわき市	42住覆土	(6.6)	-	-	(39.8)	II	E	d	320-901

表1 土製紡錘車一覧表(2)

()内は残存長・残存重量、空欄は計測未実施。*付きNo.は、文中で図示した資料。

No..	遺跡	所在地	出土地点	法量(cm)				形態	文様		報告書等 図番号
				直径	厚	孔径	重量(g)		平面	側面	
44	夕日長者	いわき市	覆土	(6.3)	-	(0.6)	(39.0)	II	D	c	320-2091
45	夕日長者	いわき市	73住覆土	5.1	2.9	0.7	71.0	II	E	d	320-2092
46	夕日長者	いわき市	94坊覆土	(4.6)	2.3	(0.6)	(26.0)	II	E	d	320-2093
47	上ノ内	いわき市	4住C2	4.4	2.7		64.9	I	B2	b	195-3
48	上ノ内	いわき市	4住C2	4.1	2.7	0.5	57.9	I	E	d	195-4
49	上ノ内	いわき市	4住C3	4.9	1.4	0.6	34.5	I	E	d	195-5
50	上ノ内	いわき市	4住C5	4.5	2.5	0.5	62.5	I	E	d	195-6
51	上ノ内	いわき市	4住C1	4.8	1.6	0.6	45.1	I	B1	d	195-7
52	上ノ内	いわき市	27住C2	4.8	3.4	0.5	97.5	I	E	b	195-8
53	上ノ内	いわき市	27住C1	4.6	1.3	0.7	(30.0)	I	E	d	195-9
54	上ノ内	いわき市	27住C3	2.6	2.5	0.6	16.0	I	A1	a	195-10
55	上ノ内	いわき市	29・30住C3	4.6	1.3	-	(14.2)	II	B2	b	195-11
※56	上ノ内	いわき市	29・30住C12	4.9	1.4		(40.0)	I	A1	a	195-12
57	上ノ内	いわき市	29・30住C11	5.3	2	-	(31.9)	I	E	a	195-13
※58	上ノ内	いわき市	29・30住C9	3.7	2.3	0.6	34.7	VI	B2	b	195-14
59	上ノ内	いわき市	29・30住C14	4.4	1.5	0.5	39.1	I	A1	a	195-15
60	上ノ内	いわき市	36・45住C4	(6.1)	1.1	-	(17.2)	I	E	d	195-16
61	上ノ内	いわき市	50住C4	5.0	2.1	0.6	63.8	I	B2	d	196-1
62	上ノ内	いわき市	円周D4P452	5.2	2.1	0.6	56.1	II	E	d	196-2
63	上ノ内	いわき市	円周C8	3.5	1.4	0.6	14.7	II	E	d	196-3
64	上ノ内	いわき市	円周D4C11	5.7	1.5	0.9	62.3	I	A1	a	196-4
65	上ノ内	いわき市	大溝F4C6	(6.6)	(1.7)	(1.2)	(35.2)	II	E	d	196-5
66	上ノ内	いわき市	H4	4.3	2.1	0.5	53.4	I	E	a+b	196-6
67	上ノ内	いわき市	F5(9)C1	4.3	1.2	0.5	(30.7)	I	E	d	196-7
※68	上ノ内	いわき市	表櫻	5.1	1.2	0.6	39.6	I	E	d	196-8
69	上ノ内	いわき市	F3	3.9	1.3	0.6	(28.2)	I	B2	b	196-9
※70	上ノ内	いわき市	-	4.0	4.3	0.5	58.8	VII	E	d	196-10
※71	八幡台	いわき市	1住	(4.6)	1.7	(0.7)	(13.9)	I	A1	d	37-38
72	八幡台	いわき市	1住	4.2	2.4	0.7	39.8	II	E	d	37-39
73	八幡台	いわき市	1住	4.7	1.9	0.7	42.7	I	E	d	37-40
74	八幡台	いわき市	1住	4.8	2.3	0.6	46.5	II	E	d	37-41
※75	八幡台	いわき市	2号墳	(5.1)	1.6	(0.8)	(16.2)	I	E	c	37-42
※76	植田郷B	いわき市	遺構外	4.9	1.7	0.9	42.2	I	E	d	119-555
※77	植田郷B	いわき市	遺構外	5.2	2.6	0.6	53.7	II	E	d	119-556
78	植田郷B	いわき市	遺構外	5.0	1.6	0.6	(31.4)	I	E	d	119-557
79	植田郷B	いわき市	遺構外	4.8	2.0	-	(25.0)	II	E	d	119-558
80	水晶遺跡	いわき市	北区グリッド	4.8		-	(77.0)	II	E	c	57-12
81	久世原館跡 番匠地遺跡	いわき市	遺物包含層	4.6	2.0	(0.8)	(20.2)	II	A1	d	59-5
82	綱取貝塚	いわき市	遺物包含層	4.9	2.4	0.4	57.7	II	E	d	268-2
※83	天神沢	南相馬市	採取資料	5.1	2.0	0.6	43.5	II	E	a	28-179
※84	桜井	南相馬市	採取資料	(5.9)	2.3	-	(42.0)	I	A1	b	17-6
※85	桜井	南相馬市	採取資料	5.1	1.6		51.7	I	A1+A2	b	17-7
86	桜井	南相馬市	採取資料	5.4	1.3	0.5	(23.6)	I	E	b	17-8

表1 土製紡錘車一覧表(3)

()内は残存長・残存重量、空欄は計測未実施。*付きNo.は、文中で図示した資料。

No.	遺跡	所在地	出土地点	法量(cm)				形態	文様		報告書等 図番号
				直径	厚	孔径	重量(g)		平面	側面	
※87	桜井	南相馬市	採取資料	5.0	2.2	0.7	(38.6)	III	E	d	17-9
※88	上ノ原	浪江町	採取資料	4.9	1.5	0.5	28.8	II	E	d	21-401
89	上ノ原	浪江町	採取資料	(5.5)	1.2	(0.7)	(23.7)	I	E	d	21-402
※90	上ノ原	浪江町	採取資料	6.3	1.9	0.8	68.1	II	C2	a+b	21-403
91	上ノ原	浪江町	採取資料	5.0	1.6	0.6	34.1	II	C2	d	435
92	上ノ原	浪江町	採取資料	5.3	(1.2)	0.7	(23.3)	-	B1	d	436
93	上ノ原	浪江町	採取資料	5.4	1.7	0.7	(50.2)	I	D	c	437
94	上ノ原	浪江町	採取資料	5.0	(2.4)	0.6	66.7	I	E	d	438
95	上ノ原	浪江町	採取資料	4.9	1.7	0.7	53.8	I	E	d	439
※96	新城山	相馬市	採取資料	(4.6)	1.4	-	(17.9)	I	A1	d	50-39
97	新城山	相馬市	採取資料	(4.7)	1.7	(0.7)	(25.9)	I	A1	a	50-40
98	新城山	相馬市	採取資料	5.3	1.9	0.8	50.3	II	E	d	50-41
99	新城山	相馬市	採取資料	5.2	1.9	0.7	60.1	II	E	d	50-42
100	新城山	相馬市	採取資料	6.2	2.3	0.7	102.6	I	E	a+b	50-43
101	新城山	相馬市	採取資料	5.9	1.8	0.9	(46.8)	II	E	d	62
102	新城山	相馬市	採取資料	(5.4)	1.5	-	(29.5)	I	E	d	63
103	新城山	相馬市	採取資料	(4.6)	(1.7)	-	(18.3)	II	E	d	64
104	善光寺	相馬市	表土	5.0	1.6	0.8	40.7	II	E	d	93-表5
105	善光寺	相馬市	表土	4.7	1.5			II	E	d	94-表16
※106	土取場B	須賀川市	2塚封土下	4.6	1.8	0.7	35.6	II	C2(波状)	b	21-9
※107	仲ノ平古墳群	須賀川市	6墳周溝覆土	6.1	2.1	0.9	(60.2)	II	C2	a	39-2
108	仲ノ平古墳群	須賀川市	6墳周溝覆土	4.4	1.8	0.6	51.0	I	E	d	39-3
109	弥六内	須賀川市	1号墳	5.5	1.2	0.7	(20.3)	I	A1+A2+B1	b	未掲載
110	弥六内	須賀川市	-	4.7	1.9	0.7	42.0	II	A1+B1	a	未掲載
111	いかづち	須賀川市	2号住居	5.3	1.7	0.8	53.6	I	E	d	未掲載
112	いかづち	須賀川市	2号住居	4.9	1.9	(0.8)	(24.1)	II	E	d	未掲載
113	いかづち	須賀川市	2号住居	5.8	(1.5)	0.6	(41.7)	II	E	c	未掲載
114	いかづち3号墳	須賀川市	4層	5.5	1.7	0.7	41.3	I	E	d	未掲載
※115	いかづち3号墳	須賀川市	-	(3.5)	(1.6)	-	(7.6)	II	A1+A2	b	未掲載
※116	牡丹平	須賀川市	57T-L II	(2.7)	1.7	(0.9)	(17.0)	VII	E	d	60-5
※117	牡丹平	須賀川市	67T-L II	(2.6)	1.1	-	(10.0)	I	A1+A2	b	60-6
※118	北山田2号墳	郡山市	墳丘表土					I	C2	d	14-2
119	北山田2号墳	郡山市	墳丘ベルト					II	E	d	14-3
120	北山田2号墳	郡山市	周溝堆積土					-	C2	d	14-4
121	正直A	郡山市	遺構外	5.2	1.5	0.7	37.0	II	A1	d	343-222
※122	正直A	郡山市	遺構外	5.6	1.3	0.6	47.0	II	A1	a	343-223
123	正直A	郡山市	遺構外	(3.2)	2.3	-	(20.8)	II	A1	d	343-224
※125	正直A	郡山市	13TL-I	4.4	1.9	0.9	35.0	II	E	d	10-1
※126	大池下	石川町	34TL II	5.7	1.7	0.8	53.0	II	B2	b	50
127	大池下	石川町	21TL I	(5.9)	1.2	(1.1)	(33.0)	I	E	d	51
※128	山ノ神B	石川町	13T住覆土	5.4	1.9	0.7	60.0	II	D	b+c	1
129	背戸B	石川町	7TL-III	5.5	2.0	0.9	62.0	I	E	d	125-2
※130	台ノ前A	田村市	1-2井戸覆土	4.7	1.2	0.7	(39.0)	I	B2	d	30-4

表1 土製紡錘車一覧表(4)

()内は残存長・残存重量、空欄は計測未実施。*付きNo.は、文中で図示した資料。

No.	遺跡	所在地	出土地点	法量(cm)				形態	文様		報告書等 図番号
				直径	厚	孔径	重量(g)		平面	側面	
※131	山ノ下	福島市	G10LⅢ	6.2	1.8	0.7		I	A1+B2	d	15-8
※132	天王山	白河市	E号地点	(5.0)	1.9	(0.8)	(20.9)	II	A1	d	459-189
※133	天王山	白河市	E号地点	5.2	1.7	0.7	45.2	II	C1	a	459-190
134	明戸	白河市	11住覆土	(4.3)	2	-	(19.0)	I	A1	a	7-32
※135	明戸	白河市	遺構外	4.8	1.7	0.8	42.0	I	A2+B1+B2+A1+A2	b	23-1
136	明戸	白河市	遺構外	(4.7)	1.5	-	(18.0)	I	E	b	23-2
137	明戸	白河市	遺構外	(4.6)	1.4	-	(18.0)	II	E	a	23-3
※138	明戸	白河市	遺構外	5.3	1.8	0.8	54.0	II	D	c	23-4
139	明戸	白河市	遺構外	5.3	1.7	0.7	55.0	II	D	c	23-5
140	明戸	白河市	遺構外	6.0	0.8	1.0	32.0	I	A1	a	23-6
※141	能登	会津坂下町	遺物包含層	(3.0)	0.8	-	(11.0)	I	A2+C2+D	c	56-538
142	能登	会津坂下町	遺物包含層	(2.6)	1.1	-	(10.0)	II	E	d	56-539
143	能登	会津坂下町	遺物包含層	-	0.7	-	(9.0)	I	D	c	56-540
144	館ノ内	会津坂下町	南堀跡	5.2	1.2	0.7	46.2	I	E	a	72-1
※145	館ノ内	会津坂下町	遺構外	5.7	1.7	0.7	55.4	II	A1	a	97
※146	桜町	湯川村	61坑21	6.2	2.0	0.8	60.0	II	A1	a	71-7
※147	屋敷	会津若松市	1特殊遺構覆土	6.1	1.5	0.8	56.0	I	E	d	236-743
148	屋敷	会津若松市	7特殊遺構覆土	4.9	1.1	1.0	(29.0)	II	E	d	243-776
※149	油田	会津美里町	遺構外	6.0	1.9	(0.9)	(41.3)	I	A1	a	591-35
150	油田	会津美里町	遺構外	(7.1)	1.5	(0.9)	(20.2)	I	A1	a	591-36